

大雪山国立公園連絡協議会登山道維持管理部会（第 9 回）
表大雪地域/東大雪地域合同会議 議事概要

日 時：令和 7 年 6 月 26 日（木）10:00～12:00
場 所：東川町せんとぴゅあⅡ（オンライン併用）
出席者：出席者名簿参照

1. 開会

●事務局の大雪山国立公園管理事務所岡島所長より挨拶

2. 議事

●新構成員の福山市立大学澤田教授のご紹介・ご挨拶

(1) 登山道等の協働型管理の課題整理について

説明：事務局 友野

- ・資料 1 は大雪山国立公園ビジョンに基づき登山道に関する課題・目標・行動計画の整理を目指したもののだが、これまで本質的な整理に至らなかった。
- ・今回、改めて課題を整理してポイント 5 点にまとめ直し、それぞれの方策や進め方案の中でも登山道部会で取り組むとよいと考えた項目を赤字で示している。
- ・ポイント設定の①については、登山道の区間や路線ごとの課題・方針を明らかにすることを通じて具体的に改善に向けた検討ができるのではないかと考え、別紙に欄の追加や整理を行った。保全の仕組み作りの面では、まず路線・区間の維持管理に必要な各種試算などが必要。
- ・②は、本日の議案にもしている歩道等維持管理作業実施手順マニュアルの運用を通して、また人材育成に関しては技術指針の活用も通して検討していく想定。
- ・③は、大雪山国立公園連絡協議会ホームページ内に設けている登山道維持管理データベースの運用は進んでおらず、今後登山道補修技術検討会で議論しつつ、部会の取り組みという形で進めていきたい。
- ・⑤について、既に利用体験ランクの設定などの取り組みはされているが、登山者に伝えたいメッセージを明確化することがブランディングに繋がるのではないかと考える。

<質疑応答>

・北海道山岳整備 岡崎 代表

保全の立場で、崩れた道を治し、植生を復元させることを続けてきたが、全ての作業が後手に回ってしまう。ひどくなる前に、どういう利用をさせたいのか、生態系が崩れない適切な利用量を考えてそこからすべきことを計画するのが本来と思う。今の資料では課題の検討から始まって利用の方針で終わっており、順序が少し違うのでは。

→事務局 友野

いただいた視点は今の整理には抜けていたところ。別紙に登山口での利用者数情報等を追加し、その上で区間ごとの利用者数に対する見解を入れて課題の整理に繋げるような構成を考える。

→北海道山岳整備 岡崎 代表

白雲の山小屋は避難小屋なのにオーバーユースになり、打つ手がない状態。本当は山に来てもらいたいが、それをなかなかうまく発信できないという部分もある。お金を回すという意味で利用を考えることは大事と思っている。

そして、資料に「順応的管理」という素晴らしい言葉が書いてあり、生態系を守るためには必要な考えだと私も思っているが、そのためにはどういう生態系であるべきかという目標がないと順応的管理にはならないはず。モニタリングをしながら随時計画変更して進めていくのが順応的管理ならば、最初の

目標設定はかなり難しい。お金をかけて研究者チームを作り、まとめ上げることが必要になると思っている。

→山岳レク研 山口 事務局長

日本の国立公園は大雪山に限らず適正な利用というものが決まっていない。登山道も山小屋も、どういう使い方がいいのかという適正な利用基準と、何人まで受け入れられるのかという環境容量の両方がない。来るものを拒まず、楽しんでもらう人は何やっても構いませんとまでは言わないが、ほとんどお咎めなしだ。なので岡崎さんの言う通りだが、渡邊先生提案の登山道ビジョンをどうすべきかというところに今後すり寄せていければよいと思う。

・北大 愛甲 教授

資料は整理されて分かりやすくなったと思う。一方で今の話を合わせて考えると、資料には路線ごとにグレードだけが書いてあるが、グレードを決める時にどういう利用をする/してもらおうということを想定した議論をかなりしていたはずで、それを資料に加えることで今の課題にも答えられると思う。さらに進めて言えば、予防保全の観点が必要で、現場で何か起きてから対応するというのを繰り返しても全然カバーにならない。どこで逆転できるか分からないが、登山道の長寿命化計画を立てるような感じで本来あるべき状況とそれに近づけるための優先順位を考え、利用量に合わせて利用の適切な時期なども検討事項になるのではと思った。

・Asahidake Trail Keeper 藤 代表

今は登りたい人はいくらでも登れるというような、特に入山に関して管理がされていない状態だと思うが、その中でこのブランディングを決めたとして、グレードなどと同じように伝えるだけのものなのか、もっと入山を管理する方に持っていくのか。

→事務局 友野

管理の程度を最初に決めているわけではないので、ブランディングや適当な利用量などを設定した結果、制限が必要ということになれば当然検討すべきかと思う。

→北大 渡邊 名誉教授（コーディネーター）

ブランディングは間違えると、ただ単に利用者を引き寄せるだけになるので、なぜ行うのが大切。例えばこの区間はこういう自然環境を満喫することができます、こういう植物や地形が見られますといった価値だけでなく、登山道の荒廃の進捗度、それに対する取り組みや目標がきちんと伝わるようにすべきだと思う。そこまで含めたブランディングによって利用者の意識を変えていく、できれば新しい人にもボランティアや寄付、協力金に関わってもらうことに結びつけようというのが大雪山で行うべき登山道のブランディングだと思う。例えばニュージーランドで行っているようなブランディングというより一歩進めて、世界で大雪山でしかない登山道のブランディングのようなものを目指すのがよいと思う。

・大雪山自然学校 荒井 代表理事

ブランディングの話、どうやって社会に理解してもらおうかということでは、今は旅行会社がすごく協力的になっていると感じている。姿見でレクチャーやガイドもしている中で、これまでは個人旅行はインパクトが少なくいいよねと言われていたが、この5～10年の流れは地域側が旅行会社としっかり手を組み、旅行会社が管理して動き、信頼関係や担当者の責任の所在が明確な形で旅行会社とできるというのが分かってきた。今後ブランディングやビジョンを作ったときには不特定多数に対してキャンペーンを張るというよりは、同時に明確にどこを手を組んで進めるかという具体的なステークホルダーが見えるという社会状況があるということを経験したい。

・山樂舎 BEAR 代表 兼 層雲峡ビジターセンター 佐久間

資料の1番から5番のどこに入るかわからないが、登山口へのアクセスのしやすさと登山の難易度の乖離を今シーズンすごく感じている。例えばロープウェイがある黒岳はロープウェイとリフトを利用して七合目まで簡単に行けるがそこからは雪山になり、そこでスニーカーと短パンの人が山に登って途中で転んだりしているという状況が現に起きている。高原温泉は6月10日に町道がオープンしてヒグマ情報センターがオープンするまでの間はスキヤーが結構入る状況で、今年は6月21日まで入山禁止になっていたと思うがスキーの人たちは知らない人が多いと思う。それに対してロープを張るといったことも全然なされてなく、知らずに入ってしまった人も結構いたと思う。それに関するクレームがビジター

センターに来て対応に苦慮するということがあった。銀泉台も6月12日にオープンし、オープン時点で全面雪のような感じで登山の難易度は結構高かったが、その時期に行きたい人の中には蝶々の写真撮りたいだけの人などがいて、そういう人たちは登山の技術はほぼなく、そんな人たちも行ける状態を作り出してしまっている。もしちゃんと管理するのであれば、林道・町道やロープウェイがオープンの日にしっかり管理ができていない体制を作らないと、今後遭難などはどんどん増えるのと、ヒグマの問題でも林道や道道といったところとも連携していかないと、今後外国の登山客がさらに増えることを考えると、自然環境だけでなく安全面も問題が出てくると思う。それらも登山道や環境保全と関連付けていければよい。

→事務局 友野

今シーズンに入る上で、今話があった沼巡りコースの入り口の部分や黒岳のことも含めて課題として聞いており、環境省で全て把握できてはいないが、対応が後手に回ってしまっていると感じている点はいくつかあった。

それらの解決策やアウトプットが、グレードの再設定といったところなのかどうか分からないが、ひとまず個々の問題に関してもう少しアンテナを張って先手を打てるようにしないと反省をするところがあった。

<まとめ>

・事務局 友野

今後の進め方に関して、資料の赤字になっている部分に順次部会で着手していければと思うが、本日の意見を踏まえて利用に関する目標や課題の整理等で資料自体を一部見直す必要がある。資料1の本体部分も整理しつつ、次回部会までの間でもコーディネーターの渡邊先生と相談しながら、整理が済んだ部分は予め部会内で意見をいただくといった進め方を検討する。

→山岳レク研 山口 事務局長

登山道専門員公募の話はその後どうなったのか。登山道専門員一人が付けば仕事量がだいぶ違うのでは。

→事務局 友野

これまで募集を計3回行ったが、残念ながら採用に至っていない。今も4回目の募集中で、選考がうまくいけば9月1日から配置されるので、皆様でも人材の見当などあれば協力いただけるとありがたい。

(2) 「登山道ビジョン」作成の試みについて

説明：事務局 友野

- ・登山道の保全や管理に関することは、大雪山ビジョンの4つの目指すべき姿「守り、活かし、つなげよう、みんなでつくる、世界を魅了する大雪山国立公園」すべてに跨っており、登山道独自のビジョンや目指すべき着地点までは設けていない。
- ・大雪山ビジョンを作成した時も、多くの議論を重ねた上で、関係者の皆さんの合意ができる文言に落ち着いた。登山道について、それに相当する「登山道ビジョン」の文言の具体案は事務局でもないが、関係者の中で検討してみて何か言い当てることができれば、共通の目標に向かって進めていくという点で大きなベンチマークになると思われる。
- ・もし決められなくても、検討の機会を設けるということだけでも意義があるのではと考え、渡邊先生からのご提案も踏まえて「登山道ビジョン」の作成を試みることに今回の提案とした。進め方は資料記載の通り。

<質疑応答>

・北海道山岳整備 岡崎 代表

登山道の、管理ビジョンなのか、利用ビジョンなのか、風景ビジョンなのか、全部が合わさるのか、どこを目指すのかが分からない。大雪山ビジョンと相当重なるのではないかなと思うが、全国的に登山道の課題は今ものすごく出てきて、各国立公園で取組が始まっている中で大雪山は先進地と見られている。なので、例えば「登山道管理ビジョン」のように、もっと具体性があるといいと思う。先ほどの話のよ

うに、利用はどうあって、管理、景観、どう利用してもらいたいのかという風に全部繋がるのかとは思いますが、要は大雪山ビジョンの「守る」という部分で一番必要なところが登山道なのかとも思うので、その辺りが明確だと考えやすいのではと思った。

→北大 渡邊 名誉教授（コーディネーター）

名称は仮定の段階だが、これを管理者に対して述べるのか、利用者に対して述べるのか、という点を漠然とさせているのは、まさに大雪山ビジョンで考えたことと全く同じ。私たちが考えていかなければならないことは、岡崎さんが先ほどおっしゃったように、我々はひどくなってから整備するというやり方をずっとしてきていて、それはいわゆる対症療法、現状維持でしかない。それは、大雪山国立公園のビジョンなんか知らないという意味で、それはおかしいでしょうというのがベースにある。名称は別として、私たちがこれから先の大雪山の登山道についてどう考えているのかを共有をしようということで、それがもしかすると十人十色でバラバラで 1 つにまとまらない、又はある程度の人たちが大体この幅に収まる、あるいは、例えば一番いいのは 50 年前の登山道の姿なのでそれに戻しましょう。それが私たちの目指す姿です、のようになるかもしれないが、そのどれでもよいと思う。ともかく我々の間で皆がどう考えているのかを共有して、それをベースにこれからどうするか、どの方向に進もうかということを考える材料にするためのビジョンだ。なので、大雪山ビジョンのように利用者の方々に公表できるかどうかさえまだわからず、協議会の中だけで使う言葉になるかも知れない。それらも含めて、まずは意見聴取を行いたき台を作るということを考えている。

→事務局 友野

「登山道ビジョン」を確定した固有名詞のように使ってしまったが、そうではないので（仮）に改める。また、管理なのか利用なのかといった方向性を最初から定めてはいない。大雪山ビジョンも 4 つの項目からなっており、先ほどの説明では何か 1 つのというような言い方をしてしまったが、例えば管理に関することと利用に関することなど複数設けるということも一つの方法だと思う。今後意見照会をしていく中で、その方向性自体も検討できればよいと想定している。

→山岳レク研 山口 事務局長

こういった登山道に対する今後の思考の球出しを行うことには賛成。今まで登山道は安全快適便利な利用施設として捉えられてきたが、今後に残すために環境保全しつつ利用体験を確保しながら使う保護施設でなければならないと思っており、今は転換期なので、皆の考えを出すことは非常に良いと思う。後で KJ 法で並べ替えができるので、20 文字程度でアイデアをたくさん出していただく方がいい。まとめる前に誰が何の意見を出したという情報を一覧でフィードバックしていただければありがたい。

・大雪山自然学校 荒井 代表理事

岡崎さんの質問と渡邊先生の説明で、ビジョンの取扱説明書みたいなことかと思った。つまり、ビジョンを作った時にどう扱ったらいいかわからない、作ったけどこんなはずじゃなかった、となることを恐れてしまって話が進まないのがよくあるケースだと思っている。渡邊先生が仰った通り、多様な考え方はもちろんあっていい、ただこれ以上登山道を壊してはいけない、自然を破壊してはいけないという最低ラインはある中で、ビジョンに対して具体的に行動計画を作ってまとめられるということさえ我々の中で担保されれば、具体的に実行していけるかと思った。

・北大 渡邊 名誉教授（コーディネーター）

登山道に関してそれぞれ強い関わりを持っている団体もあればそうでないところもあり、温度差もあると思うが、その大小に関わらず登山道のことを自分事だと考えて、どんなご意見や考えでも構わないので、たくさん集まれば集まるほどよいと思うのでぜひ意見を出していただきたい。

(3) 大雪山国立公園における歩道等維持管理作業実施手順マニュアルについて

説明：事務局 友野

・本マニュアルは、平成 30 年に初版の案が作成され、令和 2 年に当部会名で改訂案を作成しており、その後運用が進められていが、今年 1 月の登山道補修技術検討会より既存案の改定を進め、最終案となっている。今回、検討課題の整理や「登山道ビジョン」のような割と根本的な部分を議題としている

中で、本件に関しては割と具体的な運用面の取組となり突出してしまうようなところもあるが、これまで案の状態で置かれていたマニュアルを一旦確定して運用段階に入っていきたい。

<質疑応答>

・山のトイレを考える会 仲俣 事務局長

別紙3のピクト表示について、誘導標式や案内板には今後こういうピクト表示を使っていくということか。

→事務局 友野

本マニュアルでは看板の補修といった作業内容も想定しており、その場合の表示例。環境省で整備を行う場合にこれらの表示を用いている。技術指針により全国統一的に進めている部分もあるが、各国立公園で異なっている部分もある。

→北大 渡邊 名誉教授（コーディネーター）

避難小屋に関しては北海道の問題かと思うが、避難口のマークがついていて、少なくとも小屋の中身を表しておらず、特に外国人が見たときに分かりづらいと思う。例えば海外の事例などでももう少し何か良いものがないかと思う。

→事務局 友野

このマークが全国共通か今この場では分わからないが、大雪山でこれを使うのはどうかということもあると思うので、こういった部分は個別に検討したい。

・上川総合振興局 中島 主査

資料3の標識の整備の考え方は、今後はこれで行くという意思表示なのか、ただの例示なのか。標柱は角型で、今の環境省のデザインでという風に見える。

→事務局 友野

考え方を示しているもので、全ての標識をこのようにしていく方針ではなく、特に既存の標識の改修の場合にはこの構造にすべて改めなくてはならないわけではない。

→上川総合振興局 中島 主査

例えば「誘導標識本体には木材を使用する」については、個人的には木材ではなくてもよいと思う。ヒグマにかじられることがもう分かっている中で、木材を使用するとここにわざわざ書くのがなぜなのかと思った。特に誘導標識については、もしここに書くのであれば、できれば道とも相談させていただいた上で載せてくれた方がよいと思う。

→事務局 友野

この部分は以前の案の時から変わっておらず、特に今回の検討でも課題に挙がることはなかったので、今の段階で修正の検討をしてもよいのかも知れないが、一旦はこの通りで運用を始めて、また他の箇所でも課題が出てくるかも知れないのでその時に改訂を検討できるとよいかと思う。

・大雪山自然学校 大塚 自然保全員

姿見園地では北が上になっている標識と向いている方向が上になっている標識が隣り合っている箇所があり、地図が読めない人が自分がどこにいるかわからなくなり、ロープウェイの方向に帰らなければいけないのに登山道の方に歩き始める人がいたりすることがあるため、誰でも入れるエリアでは配慮が必要かと思った。

・北海道山岳整備 岡崎 代表

北海道の標識の地図を何十箇所か修正した。地図の内容は、使う人、環境、保護の対象が変わっていくことで少しずつ変化していくべきものと思う。また、基本的に標柱は修理を前提とすべきで、修理をしない形で立てられボロボロになってそのままというのが今までなので、修理をする前提で考えておくと、その度に状況に合わせられる。なので木材を使用しても構わないが、その代わりヒグマに少々食われる。その度に修理をするという強い意志でやるならそれでもいいし、かじられないように違う材を使うのもいいと思う。地図が読めない人がいるなら、そもそも地図をなくすのもありかも知れない。固定概念で、地図はこう、標柱はこうと決めるよりは、その都度色々考えながら行くのがよいと作っていて思った。

・Asahidake Trail Keeper 藤 代表

旭岳では何合目という標柱がすごくボロボロになっていたりするが、例えばこうなったら表示を取り替えるといった基準があるとよいいつも思っている。補修を検討する基準が必要と思う。

・北大 愛甲 教授

長いことこのマニュアルを作って成案になった形なので、今回かなり整理されて良かったのではと思う。ピクトグラムの話は、避難小屋のものは残念ながら全国の技術指針に載っていて、デザインはインバウンド対応での観光庁からの要望が強かった。国立公園でこれは通じないと思うものもあったが、やむなく受け入れたケースや、独自のものを無理やり慌てて作ったりしたものもあり、まだ検討が必要な部分が残っていると思う。技術指針の中にも、各国立公園の状況に応じて使い分けてよいということが書いてあり、材質なども含めて、大雪の山の環境や状況に応じて使い分けるといったことを一言書いておくとうよいと思った。

一番大事なのは資料 1 のフローで、前から色々と言って作り直していたところ執行、未執行の区間も含めて許認可など、また、事前検討の有無や作業後に報告するといったこの手順が、果たしてこれでうまく回るのかということで、このマニュアルで回してみても、また検証ということになるかと思う。これ自体も育てていくもので、そういう視点が大事かなと思った。

・北大 渡邊 名誉教授（コーディネーター）

本来は作業フローの話がメインで、今日議論があった部分などはメインではなかったもので、議論を始めてしまうと色々なことが出てくるとは思うが、また少しずつ良くしながらということかと思う。

3. 報告事項

(1) 令和 7 年度登山道整備・維持管理実施予定（環境省）

説明：事務局 永田

・環境省の今年度の登山道整備・維持管理実施予定について報告。

・大雪山縦走線ヒサゴ沼区間の保全修復工事について、昨年一昨年と入札不調により工事実施が延期になっていたところ、今年度は区間を絞って落札され、発注できた。今年度の施工区間は資料 26 ページの右下図の通りで東西 240m の区間については木道工、ロープ柵工等を設置予定で、これを公共工事として発注し、業者は平井建設に決まった。一方で南北方向の 630m の区間は、主に登山道侵食箇所における床止工や法留工等を別契約で行う。この土留工等に関する資材については、今年の 4 月にスノーモビルで運搬して現地にデポしており、それを使って今夏に木道と合わせて工事を実施する予定。工事期間中、野営指定地内に現場事務所や作業員用の宿泊小屋等を設置するので、一部利用スペースが限られる。また、土止工等の実施にあたっては、避難小屋も一時期間作業に利用させていただくため、利用者向けの周知チラシを作成し、一昨日（6/24）から大連協ホームページや SNS 等で情報発信している。一部の関係機関には、すでにお問い合わせしているが、皆様にも周知等にご協力いただきたい。

(2) 2025 年度の登山道調査予定（北海道大学 渡邊 悌二名誉教授）

トレッキングポールを使った場合にキャップがあるかないかで土壌侵食への影響が大きく異なるということは皆さん経験的にはお分かりだと思うが、きちんとしたデータがない。海外を含めていくつかの場所で調べると、日本でも大雪山はトレッキングポールを使う場合にキャップを使っている方が圧倒的に多いが、それでもキャップがあるかないかの違いでどれくらい侵食が起こるのか、それから登山靴の底がトレッキングシューズなのか、トレランシューズなのか、それとも長靴なのか裸足なのかも含めて、6 月 30 日から 7 月 2 日に勇駒別のいわゆるクロカンコースの中で検証を実施予定。長さ 6m くらいの区間を設定して、数百回往復して変化を見るということをしよと思う。上川中部森林管理署からドローン飛行を含めて入林許可をいただいている。2 点目はドローンを用いた黒岳石室周辺の登山道浸食の状況の図化で、毎年ではないが長期にわたって継続して実施している。こちらもドローンのフライトに関しては許可をすでにいただいております、7 月下旬の実施を予定。いつものように、登山者には迷惑がかからないよう安全に配慮しながら実施したい。

(3) 2025 年 大雪山における調査計画

(北海道大学大学院農学研究院 愛甲 哲也教授)

毎年経過観察で記録を取っている裾合平と雲の平の登山道補修箇所について、どの位実生個体が出てきているか観察しており、その記録写真撮影を 7 月中旬から下旬にかけて実施予定。グレーチング施工の下の部分でどの位植物が出てきているかを今年注目しようと思い、裾合平では定点を 20 カ所位設けているのに加えてグレーチング施工した場所の下も撮影しやすい場所を今年何か所か選定する予定。今年はドローンの撮影等はせず、ほぼ登山道の上で調査をするので、入林届は必要ないかと思っているが、もし何か手続きが必要であればご指摘いただきたい。それから登山者のヒグマへの認識、対応状況の意識調査を考えている。知床国立公園で知床ヒグマ管理計画というのを作っているが、モニタリング項目として 5 年に 1 回実施することになっている意識調査があり、その調査とも項目を揃えることによって、知床でやっているような情報提供や対応策で、大雪山での登山者が比較したときにどう違うかということがわかる。結果を例として載せているが、札幌でも同じような意識調査を行っており、それらの場所と比較して、今後の大雪山での情報提供などに役立てるような情報が得られればと思う。7 月から 9 月にかけて、資料に挙げているような各所で封筒に入れたものを渡すが、ウェブサイトも作って回答できるような形で登山者に依頼をする予定。300 から 500 位の回答が集まればと期待している。調査実施時は、それぞれの場所の管理者の方には依頼を差し上げる。できれば関係者の皆さんには、意識調査用紙にもご意見をいただきたいと思っている。

<質疑応答>

・山岳レク研 山口 事務局長

環境省のヒサゴ沼の工事価格を教えてほしい。どの程度のコストで何ができるのかを詰めていくことが重要。

→事務局 永田

公共工事の部分は落札価格が約 4000 万円。

→北海道山岳整備 岡崎 代表

240m の区間の木道施工のみで 4000 万ということか。

→事務局 永田

グレーチング木道 1.8m スパン 69 基、ロープ柵約 150m と分岐点の標識工 1 基が業務内容。資材運搬はヘリコプターになることもあり、どうしても費用はかさんでいる。

→北海道山岳整備 岡崎 代表

前の五色ヶ原の工事でもそうだったが、こういう工事時にプレハブを上げて作業員の個室とし、その部分のササ刈りをしていると聞いているが、今回も同様か？

→事務局 永田

今回、プレハブ小屋は野営指定地の一部にそのまま設置するが、資材置き場は一部ササ刈りを行って、そこに留置する形を予定。ササ刈りを実施する場所は事前に北大の工藤先生にヒアリングを行って、湿地植生に影響がないように配慮して実施する。

→北海道山岳整備 岡崎 代表

最近の土木工事の作業員は外国人が多くなってきており、普通のコンビニが近くて家に帰れるという環境を好むので、山の上では生活したくないという状態でなかなか人が集まらない。なので個室にしてプレハブを別に用意しなければならないとか、生活環境を良くしないと人が来てくれないということも聞いている。そういう人が、山の何を施工できるのかという思いもある。山の施工は、やはり登山者のことを意識して、生態系を理解しなければならないし、プレハブで住めないと仕事ができないような方々にできる作業ではない。一昔前なら、今は差別用語だが土方と言われる人には、私たちよりも土や植物のことを理解した人、ものすごく器用な人がいた。だが今、作業員で来る方はそんな人ではないので、そういった辺りを理解して発注しないと、作った方がいいがうまく機能しないというものが今後増え

てくるような気がしている。資料にもあった技術者の人材育成は急務であり、国立公園ごとにそういう作業ができる人が受け持つべきでないかという思いもある。4000 万の何パーセントが会社の取り分になっているか分からないが、発注の方法は再検討されるべきとも思っている。

・北大 愛甲 教授

登山者への案内文について、避難小屋には作業員は泊まらないのか。

→事務局 永田

木道工事の作業員はプレハブ小屋に泊まる予定だが、土留工の作業員は避難小屋に滞在しながら施工していただくことを今想定している。

→北大 愛甲 教授

了解。

少し気になるのが、英文で言っていることと日本語で言っていることは少し違うのではと。英文のほうには作業員が避難小屋を使うとどこにも書いていないし、何をシェアと言っているのか、この情報自体をシェアしてくれと言ってるように読める。大雪山国立公園管理事務所や北海道十勝総合振興局は英語で書いておらず、誰がこの情報を発信しているのか英文で見た人にはわからないので、少し改善した方がいいのでは。

また、例えばヒサゴ沼の野営指定地は Hisagonuma ponds camp area というのは、環境省として、それぞれの場所や施設を英語で呼ぶ時に必ず必ず決まった呼び方をするというようなものは決めていたりするのか？

→事務局 高橋

英文と日本語の文は敢えて同じにはしておらず、この時期に工事があります、でもキャンプ場は使えます、たくさんの方が来た時は譲り合って、という意図で書いている。グレードマップを作った時に英名は概ね決めている。

→北大 愛甲 教授

日本人の登山者には、今年はヒサゴには泊まりにくいのかな、とこれを見れば分かるが、野営指定地にテントを張れる面積がどれ位少なくなるのか、ヘリコプターの離着陸がとあるがどこで行われるかも分からず、少し具体性に欠けている。今年ヒサゴへ行っていいものかどうかと、おととい大連協のホームページを見た時にもふと思ってしまった。泊まれるのか泊まれないのかも含めて、外国人にも伝わらないと思う。

→事務局 友野

チラシの内容は再検討したい。英語表記に関しては、国立公園のマップなどで使う固有名詞も完全に統一されているかは分からないが、基本的に統一感を意識しながら作っている。

→北大 愛甲 教授

英文のグレードマップに乗っている固有名詞を公式に使っていくともし決められていれば、できればそれを一覧表にして関係者で共有しておいていただけるとありがたい。最近は外国人対応で英語版を作らなければならないこともあり、その場合に英語表記が決まっていればそれに従うしかないわけで、一覧があると助かる。また、ヘリはどこで離着陸するのか。

→事務局 永田

避難小屋の横のササを刈って確保する予定。

→北大 愛甲 教授

ササを刈ってそこにヘリの離着陸場を作り、資材置き場もその近くということか。少し心配したのは、分岐の辺りではないかということが気になっていた。

→事務局 永田

工事実施前、来週に現地の下見に行き、最終決定する予定。分岐の地点にヘリが離着陸できるほどのスペースは確保できない。

→北大 愛甲 教授

分岐の土砂がたまっているところより上に台地があり、野営指定地があふれるとテントを張る人が出てくる場所がある。そこが恒常的に踏みつけられると良くないと思っており、資材置き場にされないかが少し気になっていた。

・北海道山岳整備 岡崎 代表

240m で 4000 万ということは、1.8m のグレーチングを 69 基ということ。これは本当は中島さんから言われることなのかなと思うが、裾合平の木道はこの 4 年間で、木道から完全にグレーチングに変わる。これがトータルで、600m で 1000 万。これは儲けを全く取っていない上に持ち出し分もあるのでこれでいいとは全く思わないが、それでも可能だということ。なのでいろいろなことを考え直す時期かなとも思っている。ヒサゴのは 630m の区間については資材運搬と施工を分けていて、資材運搬は私が担当したが、8t の運搬で 250 万以下。これをヘリでやるとなるといくらかかるのかという話にもなる。要はヘリでなくても安い費用で何とかできるという方法も既にある。なので、一つは工事に参加できる山岳関係者を増やしていった、技能を上げなければいけない、生態系のことが分かった人が整備しなければならないという部分。それと費用、要は予算を引っ張ってくるのは環境省の方の努力だと思うが、その努力がちゃんと大雪山に報われるような形の工事発注だったり受注になるべきと思っている。新しい手段はできてきているので、ぜひ考えてみてほしい。

＜その他情報共有＞

・上川総合振興局 中島 主査

忠別岳避難小屋の壁とている扉の取手が壊れていると情報提供があり、壁は風雪は吹き込まないように直したので利用については大丈夫だと思うのと、扉の取手も来月中に直す予定。また、大沼の野営指定地は現在満水状態で野営できない状態。裾合平のクラウドファンディングは今年も目標達成でき、岡崎さん方の指導のもと残りの区間について進めていきたい。来年度はクラウドファンディングをする予定はないが、今年度集まったお金で買った資材を来年度補修用として使わせていただこうと考えている。また、廃材を下ろす作業も来春に必要とりあえずは、ここ 4 年で 1000 万皆さんからご寄付いただき本当に感謝申し上げます。

・北海道山岳整備 代表 岡崎

ヒグマ情報センターの管理者として、ヒグマのことを皆さんに考えていただきたいなという時期になったと思っている。去年は沼めぐりコースで人に近づくヒグマが 2 頭以上いた。人のことを気にしないヒグマが最近増えているのは分かっているが、人に近づいてくるヒグマとは全く別物、排除しなければならないものぐらい別物で、利用などというのはそういう場合には本当はできないと思う。去年は紅葉時期に被ったので、上川町さんがボランティアを多々配置してくれてなんとか通すということにしたが、ここで事故が起きたら大惨事だなと思ってもうヒヤヒヤであった。熊が増えると同時にそういう熊が少しだけ出てくるだろうと思っており、その時に大雪山としてヒグマをどう思えばいいのかということをお皆さんも一緒に考え始めていただきたい。現状ではどちらかというと個人やガイドさんの体験談をもとに、ヒグマはこうだという話が蔓延しているが、そういう情報もどんどん更新されていくべきというのが一点。それと、問題ヒグマが出た時に国立公園内であっても排除できるかどうかと言ったらその検討すらされていないのが現状。登山者の不注意で人間の食べ物の味を覚えて小屋に近づくようになってしまった個体が確実にいるというような時には排除するしかない、専門家に尋ねれば口を揃えてそう言うが、その手法や体制作りをしなければならない時期に来ていると思う。今後、利用が滞るといった後手に回らないようであれば早めに考えていただきたいし、私たちも全力で考えているところ。今期の沼めぐりコースでは、初日に全然逃げない個体が出て規定通り 3 日間閉鎖した。今期はそういう状況が確実に続くだろうと思っているが、対応しながら来期以降どうするかを関係行政と色々話し合っているところ。それと、今期から旭岳にも整備人を立ち上げた。上川の連絡協議会と白雲岳の整備人を協力金で運営し、登山道を直す専門員を配置する取組を行っているが、旭岳方面でもやりたいということをお東川町に相談して、出資していただいて実施することになった。環境省の点検業務を含めて、人員を配置していくとともに登山道整備もするという形を想定。狙いとしては、歩道の管理者が区間ごとに分かれている中で、別々に情報発信されると登山者としては分からないだろうと思い、一帯として管理や情報発信ができる

専門員が必要だとずっと思っていたので、それを今期配置してこれが続くようにしていきたいと思っている。情報は度々共有していくので、何かあればぜひご意見いただきたい。

・北大 愛甲 教授

ヒグマの件について、知床では全道のヒグマ管理計画とは別に知床半島ヒグマ管理計画を作っており、それは世界遺産としての顕著な普遍的価値がヒグマを中心とした生態系ということもあって別枠になっていて、そこでゾーニングして管理をしている。ただ、その知床ですら今、国立公園内であっても場合によっては個体群管理をしなければいけないという話が出ているところだが、一方で全道のヒグマの管理計画は改定されてゾーニング管理をこれからしていくということになっている。そのゾーニングは市町村単位なのか振興局単位なのか分からないが、その時に大雪山国立公園の中と外をどう扱うかといった検討や議論が振興局の中で行われているかどうか知りたい。

→上川総合振興局 中島 主査

北海道ヒグマ管理計画で、ゾーニングについて載ったのは今回が初めてで、実際には各市町村ごとのゾーニングを振興局の計画とし、それらを集めて全道の計画とする方針で動き始めたばかり。大雪山国立公園での個別の管理計画といったものは、国指定鳥獣保護区でもあるので環境省で少し検討されているところ。

→事務局 友野

高原温泉地区に関しては独自の管理運営計画案が以前作られており、その中でヒグマの対応についても整理をしているが、大雪山国立公園全体に関しては具体的なものはない。

→北大 愛甲 教授

ヒグマの行動段階の整理で、つきまといをするようなヒグマが現れた場合に国立公園の中でも駆除できるかという課題があると思うが、その辺りはどう考えているか。

→事務局 友野

市町村ごと地域の事情や国指定鳥獣保護区での手続面の課題もあり、全国的には実際に体制に組み込まれているところもあると思うが、大雪山に関してはまだこれからの調整、体制作りという状況。

→北大 愛甲 教授

うまく体制作りが進むとよいと思う。上川町だけで行うのも非常に大変で、森林管理署も一緒になって体制や仕組みを作って、地元が困らないような仕組みを作っていただくのがよいと思う。

4. その他

・NPO 法人かむい 濱田 代表理事

道標について、赤岳の路線は元々国有林が管理していたと思うので、看板関係は林野庁の名前が入っているものが多いが、かなりボロボロになっている。特に山頂のところに「白雲岳」「銀泉台」と表示した看板があるが、文字がもうほとんど見えず、間違っ逆に行ってしまう人もいる。今は北海道の路線ということになっていると思うが、看板の取り替えとかはしてもらえないのかという話を出しておきたい。

→上川総合振興局 中島 主査

過去に林野庁が作った看板が今倒れていて、ほぼ寝ているような状態。林野庁で撤去だけはするのか、北海道の執行路線だから道で対応するのかといったことを今後相談していくことになる。

→NPO 法人かむい 濱田 代表理事

自分で直してもよいのだが、どこの許可を取っていいかわからず、個人ができるような体制ではないので、そこをまとめてほしい。

5. 閉会